

空

平成28年七月10日発行

第14巻3号

通巻第67号

空



2016・6・7

SORA 67号

柿の花

柴田 佐知子

麦秋や赤子笑へばみな笑ひ

白玉や家の中にも母の杖

母支へめでたく茅の輪くぐりけり

確かめてまた尺蠖の進みだす

緋鯉見る子の背を風が押しにけり

売店に人影のなき登山口

餌時の鶏舎震へて柿の花

子子の水あちこちに村暮るる

老人に早き風呂焚く麦の秋

山ひとつ抱へこみたる大花火

母横に移して寝莫塵敷きにけり

言ひにくきことも言ひます白上布

葉桜の風あるばかり秘仏堂

雷鳴の遠ざかりゆく逢瀬かな

廻りつつ青蜻蛉の流れゆく

螢火の一人となれば荒びけり

福岡 高倉 和子

恋猫の罰を受けたるとき顔

くらがりを好みてゐたる花疲れ

青空の中より戻るふらここよ

葉桜や砂のざらつく薬師堂

青畳匂ひて夏の来りけり

軽々と飛んで闇へと青蛙

最後まで悪人顔や夏芝居

石段を登りつめたる緑かな

東京 中田みなみ

更衣けさの電車の響きよき

五月風昔は白の似合ひけり

ぎらぎらと野川流るる菜種刈り

なめらかに瓦礫の上を蛇這る

蛙吞みし蛇の胃袋どの辺り

たんぼぼの架まだ見ゆる夕まぐれ

くねらせて魚に串刺す青しぐれ

声挙げて虹を薄めてしまひけり

長崎 荒井千佐代

埼玉 服部早苗

潮騒や寢墓の罅にうまごやし

玄関に拾ふ羽毛や復活祭

春シヨール暗くて狭き懺悔室

靴ずれの完治九日花なづな

鰯買うて帰るルルドに一礼し

一葉の使ひし井戸や初燕

蠅生る医書と聖書のはざまにて

貫入の音のかすかに日永かな

病人が家中灯し薔薇の昼

宇治川の意外に大河夏近し

花うつぎ臥すには家の広すぎて

うららかに降るこもれびの無尽蔵

葉桜や記憶に父母の終の息

アーモンドかりりと噛んで春行かす

メロン切る聖痕の無き双手もて

新茶汲む終の四五滴ゆつくりと

福岡 柴田志津子

牛鳴いて一本道の日永かな

げんげ田に割り込んでゆく耕運機

青麦の中を一筋古墳道

一樹なき古墳をのぞぐ暮春かな

それぞれにリボンをつけて菊根分

眠り姫てふ名をもらふ春炬燵

戦前も戦後も長し梅漬くる

正面に活火山据ゑ大干潟

福岡 岸 洋子

猫の恋哲学の道少し逸れ

春荒れの石庭一粒の乱れなし

竹の秋風エジソンの碑にやさし

声ひそめ歩む堂内灯おぼろ

通し矢のはるかな的も陽炎へる

国家安康の大鐘に積む春埃

緑立つ閉門早き知恩院

「いもぼう」に母娘の時間花の冷え

北九州 深川 淑枝

光りつつ船遠ざかる遅桜

潮曇りせる神鏡や春の鳶

糶すみしあと猫のゐる春の河岸

島の猫寝そべる雀隠れかな

綱つづる膝にあふるる春日かな

渚ゆく一步ごと春逝きにけり

春浅し夜発ちの船に星揃ふ

海鳴りの重さ加はる春の闇

兵庫 戸栗 末廣

初蝶に影といふものなかりけり

野遊びの川底ばかり覗きをり

盆梅の幹に二つの力瘤

渦潮へほろ酔ひの声飛ばしけり

蛇出でて一面の畑湿りたる

花の夜の蟹が馬穴に音立つる

なまぬるき風のこもれる椿山

あをあをと潮の流るる子供の日

糸島 小林 朱夏

牛舎より鴉追ひ出す半夏生

死ぬまでは口を動かす金魚かな

ビール飲むあの喉仏欲しくなる

鉄棒は高さ違へて夏休み

父埋むる砂を両手に水着の子

糸田 宮井 知英

お田植祭終はれば社がらんどう

本殿の長き廻廊緑さす

麦青む光を押しして猫車

青空へ飛んで行きたき柿若葉

万緑や秘仏には厨子狭からむ

熊本 松田 明子

円柱にぐらついてゐる涅槃絵図

露地裏に名のなき仔猫ばかりなり

日本海見たく北窓開きけり

全山を仰ぐばかりの花見かな

蛇穴を出でてたちまち地震に遭ふ

福岡 山内 碧

崩れゆく城まざまざと春の地震

奮ひ立つ者へ余震や肥後椿

さくらさくら大方戦知らぬ民

時止まりしやうな時計屋燕来る

山の子は山へ草笛吹きながら

福岡 白水良子

緑蔭や子の名も並ぶ遭難碑

夫癒えてゆく北窓を開きけり

救急車止りし家の沈丁花

紙風船なき子の息の残りしか

取敢へず納戸にうつし雛しまふ

太宰府 山本則男

おにぎりのてつぺんに胡麻山笑ふ

山笑ふ石の祠に石ひとつ

生ぬるき甘茶を飲んで帰りけり

地虫出てたちまち影を曳きにけり

なにげなくあげたいものに桜餅

福岡 あさなが捷

古着屋の出店もありて御開帳

薫風や赤児の髪の子ら上がる

狐と化し飛び込む奈落夏芝居

端居して子供時代を褒めらるる

ひまはりや私がきれいだつた頃

福岡 矢野百合子

叱られし子のふらここの軋みかな

家訪へば辛夷咲く角曲れよと

拒むかに霞みてゐたる沖の島

眼に入るものみな光り夏来たる

目を遠くやりてばかりの夕端居

東京 山田 正子

ラムネ抜く少女の頃の青き海

すかんぽやりトマス試験紙青となる

流木の素性は知れず若布干す

青梅や夕べの雨の青しづく

富貴は天牡丹は地に崩れけり

福岡 永淵 恵子

春祭マイクのテスト繰り返し

風紋を来て防風に踏みけり

業平忌むかし男は泣きやすし

花嫁に大山蓮華開きけり

ソーダ水二の腕太き母となる

須恵 苑 実 耶

手足出て暫し蝌蚪とも蛙とも

廃屋に家具置きしまま著莪の花

早蕨や阿蘇の噴煙高く高く

耳打ちの声の漏れぬる万愚節

這ひ這ひは前進のみや柿若葉

粕屋 秋 千 晴

切株のまだ新しき御開帳

たんぽぽやまだついて来る迷ひ犬

霾や駝鳥の駆くる檻の中

ふらここの息を合はせて並び漕ぐ

ふらここの笑ひ声ある高さかな

北九州 横田敬子

つくしんぼ少年の背は伸び放題

今年またクローバーの咲く売地かな

リヤカーで運ぶ野菜や春隣

れんげ草どこへも行かぬ母に摘む

押し入れの茶箱干したり昭和の日

福岡 田代貞香

(田代貞枝改め)

白衣着て遍路の顔となりにつけり

遍路道固まりて来る鈴の音

讃岐路の雲よりこぼる燕の子

遍路杖夫の御魂と歩きけり

遍路宿身の上話聞かさるる

千葉 原友子

朝市や枡をあふるる白子干

梢には触れずに消えてしやぼん玉

ハンカチの木の花にある微熱かな

離島より来し風船を拾ひけり

桜しべ降る老幹の深き洞

岡垣 田中とし江

すり鉢の縁のふつくら暮春かな

夏つばめ白き胸張る梁の上

一つ足して甘夏全部転がり来

刈草を積みば剪定鋏出て

湯火照りの子の湯の匂ひみどりの夜

兵庫 岩井京子

下京やゆるりと歩き葛切へ
三味置きし昼の畳や京の春
連れられて舞妓来てをり都をどり
花の昼女将に帯を直さるる
踏み惜しむ桜の下のさくら色

福岡 吉村 摂護

洞の島百万匹の蚊を鳴かす
孤独死を潜ませてのみ梅雨の闇
更衣五臓六腑を探らるる
鎮魂の舞の鈴鳴る梅雨の森
鯖鮓の熟るる納戸の闇照らす

兵庫 石川 叔子

三月や外つ国に発つ子と無言
一日過ぎ一日老い行く花見かな
這ひ這ひの赤子見守る花筵
大方は同じ話や春炬燵
春の鳥石段五百這ふやうに

山梨 野畑 さゆり

更衣信玄像に待ち合はす
殉教の島へ小船や夏の潮
預かりし母の遺稿や夏の星
雲の峰病院めぐる福祉バス
水音を頼りに辿る水芭蕉

粕屋 吉田 葎

春荒や海人に擱まれ祝詞あぐ

桜鯛大俎で運ばるる

満載の若布舟より海女の首

絡まりし網を日除に診療所

浮かび来し海女かき抱く鮑かな

福岡 亀井 紀子

風鐸のほどよき音よ樟若葉

万緑の天の真名井を掬びけり

人寄れば贅論ばかり熱帯夜

寄り添ひし日々は短し雲の峰

子供らの帯に扇子や夏祭

北海道 押田 裕見子

男手のあるも頼らず氷割る

みつめ合ふ姿に納む内裏雛

反物の色目を合す春立つ日

抱かれし温みを胸に巢立ちけり

妊れる人へとそよぐ青葉風

福岡 樋口 みのぶ

夕暮は瀬音高まる金鳳華

涸れ滝に水しぶくごと著莪の花

かたまりて新入社員の昼餉かな

もやもやと藤棚の花ひらきそむ

昨夜よりの雨のあがりし田植かな

・第五回「空新人賞」作品・

永淵 恵子



初夏や羽根を払げて飴の鳥

灯を消してぐらり漕ぎ出すほたる舟

ほたる舟闇に引かれて進みけり

抵頭に杳音近し夏祓

形代ののけぞるほどに息かけぬ

滝裏にのぞくこの世のおもしろき

箱庭に取り戻したき月日あり

これよりは急坂となる大暑かな

時々は向きを変へやる竹夫人

天牛に男多弁となりにけり

首折りて鶴できあがる原爆忌

たちまちに大きくなりし踊の輪

爽やかやまたも阿修羅の背に廻る

曼珠沙華一世をかけし仇討も

いくさなき山河すつくと曼珠沙華

力石動いてゐたる宮日あと

古窯まで花野の人となりにけり

足も手も喜ぶ赤子天高し

田仕舞の煙大きく撓ひけり

一歳をあやす百歳小鳥来る

栗の飯死者は生者とともに生き

直情の師の寒晴れと思ひけり

百羽来て百の羽風やゆりかもめ

水鳥の羽交重ねのひとつとこ

煤逃げの文楽長き死出の旅

ひいふうみいとんでここのつ廻し猿

届出書掲げ河原のどんど焼

春祭鉛筆耳に実行委員

春節の赤ひと色の街となり

蠟涙の朱の太きも春節会